

目安以下とされた300近い保育園では計測はされていません。

数値について

そもそも、8000ベクレル/kgという基準値は経済を考慮した数値で、本来“指定廃棄物”に指定されるものであり、子どもの生活圏における安全な値とはかけ離れたものです。広島、長崎での被爆者の数十年間の経過観察データ(米国科学アカデミー、「電離放射線の生物学的影響」BEIR VII phase2、2006年刊行)によると、放射能の悪影響は女性と子どもに対して大きいと公表されています。放射線防護のための基準値は、およそ30歳の健康な男性の値をもとに作られており、5歳の女の子で5倍、12歳で3倍もの悪影響を受けるとされています。放射線防護が適用されている原発の敷地内においては、100ベクレル/kg未満であってもドラム缶に入れて厳重保管されています。缶に対して、前出の8000ベクレル/kgは100ベクレル/kgの80倍。5歳の女の子の場合、400倍となる恐ろしい値です。同様に、24,000ベクレル/kgは、240倍、5歳の女の子にとっては、1,200倍の値に上ります。一般人の年間公衆被ばく限度である1mSvは、約0.1 μ Sv/hです。前出の1 μ Sv/hは、この10倍に相当します。原発でさえ、一般人の居住区域との境目で3ヶ月で250mSv(0.11 μ Sv/h)と定めていて、これを超える恐れのある場所は立ち入り制限をしなければならぬとされています。

主張

このような放射性汚染物が特に放射能の感受性が強い子供たちの生活空間にあっていいわけはありません。また、小中学校は地域の日常の活動場所であったり、災害や有事の際も地域の人たちが入り出す公共施設でもあります。

これらの放射性汚染物を集めても総量は、平成23-24年市が集積した当初”目安を超えていたもの”だけでも十数トン、全保育園で保管しているものを加えても、横浜市北部汚泥资源化センター等に十分収容できる量です。危険物の管理の一元化は、現在の何十箇所の施設での計測の手間や、引き継ぎにより管理の更なるあるまい化が予測されることを鑑みても、最良の解決策に思われます。

子供のいる生活空間からできるだけ放射性物質を排除する一元管理を行政に要望します。

ぜひご賛同をお願い致します。

学校・保育園の放射能対策 横浜の会
「横浜の学校・保育園の放射能汚染物の施設外管理を要望します！」
(<https://www.change.org/>) から引用